

タシケント州とサマルカンド州で発見された ウズベキスタン国立歴史博物館収蔵中国鏡

V. S. ミナシャンツ (大谷 育恵 (訳))

(ウズベキスタン国立歴史博物館)

ウズベキスタン共和国科学アカデミー付属国立歴史博物館は、若干の中国鏡コレクションを有している。鏡は漢代(BCE 206年～CE 220年)のものである。

それら鏡のほぼすべてが、タシケント、タシケント州、ならびにサマルカンド州で異なる年に行われた紀元前2～1世紀から紀元後1世紀の墓地の発掘に際して副葬品の中から発見されたものである。

最初の2面の鏡は、“古蹟・美術・自然保存のためのウズベキスタン委員会”(略称:ウズコムスタリス)^{〔訳1〕}の発掘で発見された。それは統括隊長 M. V. ヴォエヴォドスキー(M. V. Воеводский)、考古学者 A. A. ポタポフ(A. A. Потапов)の下、I. N. ルツケヴィッチ(И. Н. Луцкевич)、V. D. ジューコフ(V. Д. Жуков)、T. G. オボルドゥエヴァ(T. Г. Оболдуева)が参加して1929～1930年に発掘が行われたクルガン墓地で、タシケント州のプスケントから南南東に2～3km行ったアハングラン川(р. Ахангеран)の左岸にある。様々な大きさの黄土の墳丘をもつクルガンとその内部の埋葬は、研究によってCE 5～8世紀の年代が与えられている。

B-1号クルガン^{〔訳2〕}とA-1号クルガンの副葬品には、小さな鉄製品、装飾品、土器、そして中国鏡がある(図1・2)[文献31:目録番号1143, 頁. 25; 文献28: p.24; 文献23: p.101]。

B-1号クルガンでは漢字銘文のある鏡が出土した。鏡は円形で、鋳造品である。表の面は平滑で、研磨されており、表面は反射する。鏡背面の中央には突出する半球状の高まり一鈕があり、その半球状の鈕には水平方向に懸垂用の穴があいている(孔径0.3cm)。鈕は突出する幅の狭い環と平滑な圈帯で囲まれており、それらの間の4ヶ所で突出する細線がある。この中央部分全体は、楕円形の辺から構成される内弧する八角形で取り囲まれる。それぞれの楕円形は突出する平坦面の組み合わせからなる。外側の部分は2本の狭い楕歯文帯からなり、それらの間には丸い字体の漢字銘文帯

が入り、また平らな突出する外縁がある。鏡の縁は斜縁である。白銅製。大きさは、直径9.3cm、厚さ0.2～0.4cm。

A-1号クルガンは2番目に発見された鏡である。鏡は円形で、鋳造品である。表の面は平滑で、研磨されている。背面中央には水平方向に孔のある突出する半球状の鈕があり、その鈕孔には紐が通された(孔径0.3cm)。鈕は半球状の突起が連なる環によって取り囲まれている。中央部は八角形の連弧で取り囲まれ、その乱雑な弧線は弓形の細長い盛り上がりから構成されている。続く文様帯はレリーフ状の横線からなり、不規則な円で輪郭が描かれている。この文様帯の外には二重の浮彫の鋸歯文が配置されており、それらは4つの円盤状の乳で均等に区切られている。輪郭の環と、環から離れた斜線で文様構成は完成している。外縁は幅広で、やや楕円状に厚く、縁は端部がやや尖っている。黄味がかかった青銅からなる。大きさは、直径8.6cm、厚さ0.2～0.3cm。

3番目の鏡は、1947年10月のVCE 1世紀のクルガン墓地発掘時に発見されたものである。クルガンは鉄道のヴレフスカヤ駅(ст. Вревская)から南に800m離れた所に位置しており、現在はタシケント州のアルマザル地区である。調査団の構成は歴史博物館上級研究員 M. Ye. ヴォロンツ(M. Э. Воронц)(隊長)、博物館研究秘書 V. I. スプリシェフスキー(V. И. Спришевский)、研究員の I. M. ババハノフ(И. М. Бабаханов)であった。最も興味深くかつ豊富な内容を有するのは2号墓の女性墓であった。墓には6点の土器、そして金製の耳飾りと金糸、鉄製のナイフと環と錐、石製紡錘車、青銅製中国鏡があった(図3)[文献9, p.52, 図5]。

鏡は円形の鋳造鏡で、かなり保存状態が悪く、ひび割れして酸化物質層に覆われている。表の面は平滑で、研磨されている。背面の中央には水平方向の鈕孔をもつ半球状の鈕がある。鈕は12個の突出する円珠と平らでかなり突出した圈帯に囲まれている。これら



図 1. プスケント墓地 B-1 号クルガン



図 2. プスケント墓地 A-1 号クルガン



図 3. ヴレフスカヤ駅付近の墓地 2 号墓



図 4. 記録不在の鏡（推定タシケント州出土）



図 5. タシャフトマシ



図 7. コクテパ



図 6. サナザル

中央部分全体は、楕円形の辺から構成される内弧する八角形内に取り込まれている。この内弧する八角図形の角には8つの低いレリーフ状の装飾文、すなわち円錐形に突出する一対の乳と三葉形の張り出しのついた旋回するロゼット文が配置されている。鏡の外区は2列の狭い楕歯文帯からなり、それらの間を20字の漢字からなる銘文帯が占める。銘文帯の外側は幅の広い突出する平素縁で、垂直状の縁を持つ。大きさ：直径11cm、厚さ0.2～0.3cm、外縁の厚さ0.5cm。

おそらくタシケント州で出土したと思われる記録証明書のない鏡が4番目の鏡である(図4)。鏡は円形で、鋳造品である。表の面は軽く隆起し、研磨されており、表面が反射する。背面中央には水平方向の鈕孔をもつ半球の鈕がある。鈕はレリーフ状の繭形のもの互いに端を接して独特の花形になったものと圈帯に取り囲まれている。中央部分は楕円形の辺からなる内弧する八角形の内に入っている。外縁は幅が広く平らで、鋭角の縁をもつ。黄味がかかった青銅製。大きさ：直径7.6cm、厚さ0.1～0.2cm。

5番目の鏡(図5)はまさにタシケントの市域内で発見された。1979年夏にタシャフトマシ山塊(массив Ташавтомаш)でかつて建設業者らが3～4世紀のカウンチンスカヤ文化(Каунчинская культура)の墓地を発見した。ウズベキスタン科学アカデミー考古学研究所タシケント隊の研究者A.グリツィナ(A. Грицина)は発見後に現地へ赴き、墓室の半分で2体の骨格、そしてその周囲で若干の土器を発見した。おそらくこの鏡はこの墓葬から出土したと思われる、後に考古学者に引き渡されたのだろう[文献11, pp.97-100]。

鏡は円形で、鋳造品である。表の面は平らで、研磨されている。背面中央には水平方向に幅の広い鈕孔をもつ半球の鈕がある。鈕は平らなレリーフ状に突出する細線が取り巻いている。中央部分の周囲には楕円の辺からなる八角形がめぐる。外区部分は平らな円圈帯からなり、楕歯文に接し、突出する幅の広くない平素縁に取り囲まれている。鏡の縁は表の面に向かって鋭角に切られて尖る。大きさ：直径8.2、厚さ0.2cm。大きさの異なる二片に割れている。

博物館コレクションの2面の鏡は、サマルカンド州で出土した鏡である。それらの中の大きな青銅鏡破片(図6)は、1948年秋にサングザル川(р. Сангзар)沿いの峡谷中に所在するダヴリャト村(Давлят)にお

いて仏教寺院址を視察した際、ウズベキスタン科学アカデミー考古学研究所研究員L.I.アリバウム(Л. И. Альбаум)が現地住民から受け取ったものである[文献2, p.57, p.59, 図3]。

大きな鏡の破片である。鈕は欠損しているが、鈕の周囲を取り巻く円形の枠は遺存しており、平らな突出する圈帯と、それに接する幅の狭い楕歯文帯である。中央部分は楕円形の辺から構成された内弧する八角形が描かれている。八稜星形の残存する3つの角には、3つの漢字風の記号がある。記号は「モミの木」、「十字に交差する線をもつ四角形」、「2本の縦線と4本の横線を葉脈状にもつ四角形」である。そしてこれら記号の上に「T」形のものがみられる。外区は葉脈状のレリーフに分かれた5条の同心円の溝からなる。この文様帯は突出する二重の円文によって区切られている。文様帯は幅の狭い楕歯文帯で両側を縁取られている。外縁は幅が広く平坦で、やや縁側が厚くなる。縁は斜縁である。黄味がかかった青銅で鋳造されている。大きさは直径22cm。

もっとも興味深い最後の遺物は、白銅からなる大きな鏡である。ウズベク・フランス共同考古調査団が2000年にサマルカンド州のチェレク地区(Челекский район)にあるコクテバ城址で実施したВСЕ2～1世紀の墓地発掘に伴うものである(図7)。それは35～40歳の女性の墓で、おそらく高貴な家柄の者であろう。ここで出土した金箔片は彼女の朽ちた衣服を装飾しており、袖やラベル、襟が金の飾金具で縁どられていた。墓葬の側面に沿ってガラスビーズ、香をたくための化粧用土製香炉、鉄製ナイフ片、土製の皿、青銅鍋があった。しかし最も考古学者らを驚かせたのは、ユニークな鏡があったことで、鏡は中国美術の豪華な様式のものである[文献16 p.84; 文献33 p.49 fig.10/14, p.51 fig. 11/2, pp.61-64]。

鏡は円形で、鋳造品である。表の面は平滑で、研磨されており、表面は反射する。鏡の背面中央には、水平方向に幅広の穴が通る半球状の鈕がある。穴の直径は0.7cm。鈕座は突出するギザギザの枠で、それから十字形に四辺から細線が出ている。細線の先は二股に分岐し、取り巻く文様帯を4分割し、各区画に3つの円盤状のレリーフが入っている(全部で12個)。それ全体が幅の狭い楕歯文帯と幅広く平滑な突出する圈帯で囲まれている。その次に幅の広い装飾の多い文様

帯がめぐり、平滑な線状の圈帯と櫛歯文帯で縁取られる。装飾の多い文様帯は、4つの突出する円形の乳座とその中央上の半球状の乳によって四分される。文様帯はレリーフ状の模様で装飾され、先端が蔓のように巻いた優美にくねる植物の若枝と、長くちばしと先の尖った尾をもつ小鳥がいる。小鳥らは半球状の乳の側に表現され、それをうねる蛇が取り巻く。その他にも文様帯は様々な動物紋で装飾されており、見たところウサギ、鳥、雉と思われる鳥がいるが、それらは判別が難しい。鏡の外縁は幅広く平滑で、やや縁側が厚くなる。縁はやや斜めである。白銅で铸造されている。大きさは直径 18.7cm である。

博物館が所蔵するほぼ全ての中国鏡は、形と文様において共通の特徴を有している。それらは円形で、铸造品である。それらの表の面は平滑で、研磨されており、表面が反射する。鏡の背面中央にはどっしりとした隆起する鈕があり、鈕には帯あるいは革帯に懸垂するための幅広の水平方向の穴がある。鈕は平滑な線や櫛歯文線、あるいは圈帯と楕円形の辺から構成される内弧する八角形アーチ形の縁飾りに囲まれている。ある鏡は鈕の周囲が半球からなる環に囲まれており、四分割され、それぞれに3つの突出する珠点文が入っている。そしてまたある鏡には古式の漢字銘文を持つ幅広の文様帯があり、それらの中の漢字は以下のように読めるようだ:「日」(太陽)、「光」(ひかり)、「清」(晴れた)、「白」(白い)、等々。しばしば漢字は連弧のアーチの間にもある。各鏡の背面には縁の近くに幅広の平滑な外縁帯がある。他の鏡と若干違う鏡はコクテパ出土品である。それには連弧文帯がなく、多装飾文様帯がある。

注目すべきことに、コクテパ出土鏡のそばであり大きくない骨製の板が見つかった。馬の形に彫刻した装飾のある板は、見たところ鏡の支柱であった。古代の信仰に基づくと、もちろん鏡は太陽のシンボルで、馬は最も速く駆ける動物として太陽光の神ーミトラへの犠牲にされた。中央アジアでは裏面に端に馬頭の造形のある水平方向の把手をつけた鏡が広がっていた。把手は2つの突出する脚によって鏡についている。このような鏡は、B. A. リトヴィンスキー(B. A. Литвинский)のペンジケント地区のジョル-サイ(Джол-Сай)にある墓地の発掘時に出土している。墓

葬は CE 5 世紀に年代づけられている [文献 23, p97, tab.21]。このような鏡はソグドで使用されていたものである。なぜなら、類似する鏡の把手がペンジケントとアフラシアブで発見されており、それらの遺跡は CE 8 世紀第 1 四半期に年代づけられるからである [文献 34, pp.67-68]。

図案装飾によって判断すると、博物館に収蔵された鏡はそれぞれ異なるタイプの漢鏡であり、BCE 2 世紀から CE 1 世紀の枠内に年代づけられる。それらの鏡は大量に製造され、中国とその境界を超えて広く伝播した。

持ち運ばれた出土中国鏡資料は中央アジア地域で広く知られている。鏡の論文中で検討されたもの以外に、以下で出土している: ウズベキスタン領内では、プスケントに近いアクタム墓地(Актамский могильник)[文献 25, pp.50-51]、ジュンスカヤ文化(Джунская культура)の出土品[文献 40, p.159]、1947年にファルハツ水力発電所(Фархадская ГЭС)の建設に伴って発見された鏡[文献 17, p.74, 75 図 2-2,4; 文献 23, p.101 図 25-3,24-1]。キルギスタン領内では、カラブラク墓地(могильники Карабулак)[文献 3, p.28 図 5-2; 文献 4, p.64 図 14-2; 文献 23, p.99, 100 図 25-4,6]、カイラガチ(Кайрагач)[文献 14, p.100, 101, 103 図 59-1; 文献 23, p.100]、トゥラ-タシ(Тура-Таш)[文献 5, p.15, 23,38, 57, 58 図 15-4~6; 文献 23, p.100]、ケンコール墓地(Кенкольский могильник)[文献 18, pp.72-74 図 14; 文献 19, p.69 図 6-2]、サリグ城址(городище Сарыг)[文献 6, p.28 図 10-1]、ペトロフカ-カリーニンスカヤ村(селение Петровка-Калининская)域の墓地[文献 6, p.101]、アレクサンドロフスコエ城址(Александровское городище)のチュルク期の墓地[文献 6, p.126 図 XLIX, I]。タジキスタン領内では、イスファラ墓地(Исфаринский могильник)[文献 13, p.64, 65 図 31; 文献 23, p.98, 99 図版 23-1~9]、アジナ-テペ(Аджина-тепе)[文献 24, p.17]、等がある。

次に上述の鏡の分類と年代決定について検討する。

ヴレフスカヤとプスケント墓地 B-1 号墓は八連弧文タイプの典型的な漢式鏡に属し、長宜子孫鏡と呼ばれている [文献 23, p.102]³⁾。これら鏡の研究者(ブリング、リトヴィンスキー)の最新データによると、上述の鏡は八連弧文タイプの鏡の亜類で、前漢(BCE 2 世紀後半~ BCE 1 世紀)の最終段階に最も広範に広

がった。ヴレフスカヤで出土した鏡のように、鈕を連珠文で囲んだ鏡の受容は、BCE 80 年代から紀元前後交替期に最も広範に広がった [文献 7, p.28, fig.12; 文献 23, pp.101-102]。リトヴィンスキーはこれらの鏡に BCE 1 世紀末の年代を与えている [文献 23, p.102]。同様の鏡はアクタム村付近のプスケント墓地における 1979 年の発掘 (3 号と 12 号クルガン) でも見つかり、その墓地は CE 3 ~ 5 世紀に編年されている [文献 25, p.50]。また 1947 年のファルハツ水力発電所の建設工事でも出土している [文献 17, p.74; 文献 23, p.101, tab.24-1]。八連弧タイプの銘文帯のある我々の鏡と類似するものを、私たちはまた中国陝西省西安市で出土した鏡の中に見出している [文献 20, p.69, 70, XXIII, 1,2,3]。

プスケントとヴレフスカヤでみられるように、より晚い時期の遺跡で早い時期の鏡が出土するのは、おそらく、それら鏡はその製作後長い時間を経て中国国境を越えて到来し、そしてさらに 100 年にわたり使用されたのであろうと説明できるだろう。

銘文帯を持つ八連弧文鏡の倣製鏡の製造は中世に広く行われた。11 ~ 16 世紀の中国で、漢鏡の倣製鏡を製造する風俗は広範に広まっていた。これは通常、いにしへの関心の高まりや、^{アムレット}護符として漢鏡が使用されたと説明される [文献 27, p.34,35]。銘文を持つこのタイプの漢鏡複製品は中央アジアに広まった。それらの鏡が特別に愛好されたのは宋金朝 (11 ~ 13 世紀) である。ルボ - レスニチェンコはミヌシンスク盆地におけるこの類の出土鏡について言及している [文献 27, p.33, 34 No.315~328]。

サングザルで出土した鏡片は、リトヴィンスキー論文によると、四葉座鈕と円、四重の同心円を有する鏡のタイプである。私たちはこのタイプの鏡をスルフ、ヴォルフ、そしてタジキスタンのイスファラ地区のチョルクで見ることができる [文献 21, p.76, 図 12; 文献 23, p.98, 99 図版 23-1,2,4]。

ブリングの考えでは、このグループの鏡は銘文を持つ八連弧文鏡と共通する図形を持つが、銘文帯がなく、このような鏡の製作地は中国山東省と関連するとする。それら鏡の年代はブリングによると CE 1 世紀である。同様の鏡は韓国の王肝墓でも出土しており、その遺物は CE 42 ~ 69 年^(訳4)に年代づけられる [文献 8, p.30, pl.24 (David Well collection, 直径 21.5cm)^(訳5); 文献

23, p.102]。

見たところ、八連弧文鏡タイプの中でより初期のものはおそらくタシケント地方出土の「記録証明書のない鏡」で、その鏡はタシケントのタシャフトマシ山塊の CE 3 ~ 4 世紀の墓葬で発見された。リトヴィンスキーはこのタイプの鏡を BCE 2 ~ 1 世紀から紀元前後交替期に年代づける [文献 23, p.102]。私たちはこれらの鏡と類似するものをカラブラク墓地 21 号クルガンとトゥラ - タシ墓地 15 号クルガンの出土品中に見出すことができる^(訳6) [文献 3, p.28, 図 5-1; 文献 23, p.100; 文献 5, p.15, 23, 38, 57, 58, 図版 15-4~6]。それら鏡と「記録証明書のない鏡」鏡もまた半球状の鈕の周囲に四葉形の突出があり、同心円で縁どられる。そして、タシャフトマシ地区で出土した鏡はジャル - アリク墓地出土鏡と非常に良く似ている [文献 23, p.104]。

おそらくプスケント墓地 A-1 号クルガン出土鏡は、漢代 (BCE 1 世紀 ~ 紀元前後交替期) の八連弧文鏡の倣製鏡であろう。と同時に、搬入鏡であるかもしれない。リトヴィンスキーは以下のように注意を記している: 「考慮しなければならないのは、漢においては標準度の高い鏡と共に、大量の铸造不良で美しい装飾文様を持つあまり大型でない鏡を生産していたことだ。そのような鏡もまた広範囲に輸入されていた。それゆえに、在地模倣品とそのような出自の搬入鏡とを判別して東トルキスタンにおける漢式鏡の生産総数を求めることは非常に複雑困難である。」 [文献 23, p.163]。

公表した鏡の中でその他の鏡と異なるのは、コクテパ出土の鏡である。最初にその鏡はコクテパ城址の研究者である M. イサミドディオフ、K. ラペン、F. グルネによって公表されており、彼らは鏡を BCE 1 世紀 ~ CE 1 世紀に年代付けた。

コクテパ出土鏡はカラブラク墓地 20 号墓の鏡にいくらか類似する [文献 23, p.99 図 25,6]。半球状の乳で 4 区画に分かれる幅広い文様帯、そして乳と乳の間は S 字形の文様が入る。このような鏡群は漢代に最も広がった。最初は、ボタン状の乳と、その間に蛇を描出した鏡であった。様式化の過程で、最終的に渦巻き、あるいは唐草文に変化した。この種の鏡は特に BCE 1 世紀後半に拡散した [文献 8, p.28; 文献 23, p.103]。コクテパ出土鏡には連珠文があり、ファルハツ水力発電所の建設地付近で発見された鏡には鈕を四群で取り

巻くものがある^(図7)[文献 17, p.74; 文献 23, p.101 図版 24-1]。プリングの意見によれば、その受容は BCE 80 年代～紀元前後交替期に広範に広がったという [文献 8, p.28 図 12; 文献 23, p.102]。

鈕を取り巻くデコラティブな半球状に突出する珠文は、中国の伝統によれば供献の稲穂として理解される。その数は必ず偶数で、4、8、12、すなわち 4 の倍数である。鏡においては、それらは以下の解釈を受ける：四季、8 つの変化(八卦)あるいは天体、十二宮すなわち 12 ヶ月。おそらくそれは、調和がとれた根源的な主題構成、まさに太陽の循環を映している [文献 39, p.55]。また小鳥の描写はコクテパ出土鏡の図案要素の 1 つで、おそらくそれはコウライウグイスである。コウライウグイスはしばしば中国鏡において蝶や蜻蛉と共に見られる。いずれもこれらには幸福の意味があり、特にコウライウグイスは音楽、陽気さ、幸福な結婚のシンボルとして表現される [文献 26, p.49]。コクテパの鏡に近い種類の鏡は、中国河南省洛陽市で発見された鏡の中に見られる。その鏡は前漢代 (BCE 2 ～ 1 世紀) に年代づけられる [文献 20, p.73, 図版 25]。私たちの鏡と異なり鈕を取り囲む珠文が存在しないが、そのほかは文様帯に類似性が見受けられ、そこには鳥やその他動物たち、なかでも走るウサギが描出されている。

このタイプの鏡の分布圏は相当広範である。CE 2 世紀前半の終わりには、それらの鏡はすでにドン川下流域、プリクバン、ヴォルガ川流域に流入した [文献 12, pp.143-147, 図 1-5; 文献 36, 図版 3,5,8 No. 15, 34, 420; 文献 32, p.153, 157 図 11]。外観の近い鏡は初期中世期のフェルガーナ [文献 10, p.18, 1; 文献 23, p.99, 103 図版 2,5,6] とザバイカル [文献 38, p.62 図 12] に存在する。

このタイプの鏡はさらに遅い時期においても相当流行した。多くの鏡がヴォルガ川流域地方のジョチ・ウルス時代の遺跡の発掘で発見され、そこではそれら鏡が在地の職人によって中国鏡を真似て生産されていた。A. P. スミルノフはブルガリア ヴォルガ地域で偶発的に出土したこの鏡を発表しており、それらを 14 世紀に年代づけている。この鏡の背面は、幅の狭い突出する外縁があり、中央部分は平滑で、鈕がない。文様帯は半球状の乳によって分割され、くねる若枝状の植物文である [文献 37, p.117 図 13,50]。ウケク城址 (городище Укек) ではこのような鏡が 5 点見つかった。

直径は 9.5cm で、中心にレリーフ状の同心円の圏帯がめぐる。その外側の文様帯もまた 4 つの半球状の乳で分割され、この空間は S 字形の文様でうめられる [文献 29, p.53]。L. F. ネダシコフスキーは、これら鏡の主題はおそらく中央アジア遊牧民によってジョチ・ウルスのヴォルガ地域に持ち込まれたと述べている [文献 29, p.63]。

ヴォルガ流域の城址以外では、類似する鏡は 13 ～ 14 世紀の古代東ヨーロッパ遊牧民と北カフカスのジョチ・ウルス期の遺跡に特徴的である [文献 41, 図版 XLVIII; 文献 42, p.83]。このような鏡は V. I. ゴシケヴィッチ (В. И. Гошкевич) が発掘したヘルソン近郊の遺跡で 14 世紀に特徴的な 1 組の耳飾りと共に発見されており [文献 30, p.83, 84 図 341]、カザフスタンのオトラル (отрар) の 13 ～ 14 世紀の層でもまた発見されている [文献 1, p.74 図 29,5]。

このような形で、国立ウズベキスタン歴史博物館が所蔵する大多数の鏡は様々な型のある漢の八連弧文鏡に関係している。しかしながらその中にはコクテパ出土鏡のように異なるタイプのものであり、それはおそらく四乳四虺鏡のグループに属し、漢代に最も広範に広がったものの 1 つである [文献 23, p.103]。

資料比較において類似に基づき判断した結果、私たちはここで公表した鏡の年代についてある結論を得た。

- ・タシケント地方で出土したと推定される「記録証明書の無い鏡」とタシャフトマシ山塊で出土した鏡は BCE 2 ～ 1 世紀から紀元前後交替期。
- ・プスケント墓地 A-1 号クルガン出土鏡は BCE 1 世紀～紀元前後交替期。
- ・グレフスカヤ駅付近 2 号クルガンとプスケント墓地 B-1 号クルガン出土鏡は BCE 1 世紀末。
- ・サングザル出土の大型鏡片は CE 1 世紀。
- ・コクテパ出土鏡はおそらく BCE 1 世紀後半。

漢においては、鏡の製造に際して特別な意義が金属に与えられている。それは硬い石か土製の鋳型で鋳造された。鏡の凹文様は石あるいは陶土にくっきりと刻まれていた。時には複製のために既成製品を陶範土上に押し付け、焼成した。範が片面の場合、製品はレリーフあるいは装飾を片面だけに持つことになるが、文様のより細密な鏡は 2 枚からなり、それらの鏡となる相

当面に鏡映が刻まれていた。2枚の范は金属の鋳で結合された。溶けた金属は溝に沿って范の中に入り、范の片方が切り開かれた。鑄造した鏡を取り出した後、工人はまず硬い道具で背面のレリーフ状に作られた部分をより良く仕上げた。なぜか工人は台の上に鏡背面を下にして置いて、強く押し付けて表の面の研磨を始めた。

鏡を盛んに製造する必要性は魔術目的の儀式に起因しており、鏡の銘文中にその反映が認められる。BCE 3世紀初めに出現した鏡上の銘文は、CE 1世紀までに最も広範囲に広まった。銘文は鏡の魔術的な性質、すなわち邪悪な影響と様々な魔物をその所有者から追い払うに違いないということを示している。それら鏡への信仰は広くひろまった。真の漢鏡は白銅でやや緑青に覆われるという特徴がある。装飾図案は手が込んでいる。加えて、漢鏡中央の鈕は上部が切り取られたような鈕をもつ後世の倣製鏡とは異なり、必ず丸みのある形を特徴とする。

鏡は中国語で“Jing”である。鏡という漢字の古い字体は、自身の姿を見ている人を表していた。鏡の片面は研磨されており、逆の面には芸術的図案が入っている。背面に鈕を持つ円形の鏡が、全存続期間を通して中国鏡の基本形である。この形の説明は古代中国人の天地創造の観念に求められるだろう。その観念によると、鏡は宇宙のミニチュア・コピーを表現する。宇宙は円形であるのだから、鏡も対応して円形なのである。鈕は世界の中心にある山をシンボル化している。鏡は宇宙の図で世界の調和を表現すると同時に、さらに単純な機能—すなわち悪を追い払い、その所有者に福をもたらす—を有していた [文献 27, p.8, 49]。

工人は鏡を植物、幾何学文、人や動物の描写、狩りの情景、そして天体の文様とシンボルで装飾した。各時代で図案に新たな特色が取り込まれ、現代にいたるまで早期鏡のいくつかは比類のない古代美術の模範であるとみなされている。青銅鏡は日常生活での利用のためと、祭儀のために製造されている。平滑な鏡面はその前にある像を映し、ちょっとした超自然として知覚される。それらは魔力の所為なのである。像が正確に鏡面に伝わり、鏡特有の奇跡の反映を生み出す。戦争に赴く兵士は、危険を彼から遠ざけ保護するものとして鏡を胸上に着けた。花嫁は、悪い運命が彼女にふれないように鏡を夫の家を持って行った。鏡は誠実な

人間と同義かつ象徴であり、彼の道徳基盤の清廉さの監査者である。中国では、太古から鏡の主要な意味は立派で正しい人間と同義語であった。

漢代以来中国の宗教慣習では、鏡は埋葬儀礼に広く用いられており、墓に置かれた鏡は「墓を清める」鏡である。

中央アジアにおける鏡の信仰の意味は、鏡に伴う豊穡の女神の土製小像^{コロプラスチック}が証明しており、それらはしばしばウズベキスタン、タジキスタン、トルクメニスタン地域の発掘調査時にみつかると [文献 15, p.33 写真 7, p.38 図 7; 文献 35, pp.178-182]。墓地に鏡を置く習慣は豊穡の女神への中央アジアの住民の尊崇と関連しており、鏡は女性神の持ち物で、まず第一に大地と豊穡の神を表したが、また太陽信仰とも直接関係している。豊穡や性的な力等々の拡大という魔力はまた鏡によるものであった [文献 22, p.103; 文献 23, p.111, 112]。

中国鏡は中央アジアの住民にとって大きな価値を持つものであった。高い芸術性を有する鏡はもちろんのこと、粗雑な大量生産品も十分に価値があった。完形の物だけでなく鏡の破片も大事に保持されていた。多数のそれら出土資料がそのことを証明している。鏡片はしばしば^{アムレット}護符として使用されており、その所有者を生存時と死後において守護した [文献 22, pp.100-101]。

中央アジア地域における出土中国鏡資料は、BCE 1世紀と CE 1世紀における中央アジア住民との中国の緊密な交易と経済関係を証明している。「西の端—西域」(中国では中央アジアをこのように呼んだ)との中国人の相互関係に関する最初の報告はこの時代である。中央アジアと中国の住民のこのような関わり合いは、交易の発展と経済関係上だけでなく、文化的なものとの交流面においても進行した。中央アジアの住民の中に中国鏡が拡散し、また中国美術の中へ中央アジアの美術モチーフが浸透したのもこの時代であった。

訳註：

訳 1) 原文では по делам музеев и の語が加わっており、「博物館建設そして」の語が加わっている。

訳 2) キリル文字で B-1 号墓 (A, B, B なので 3 番目であることに注意)。

訳 3) 認識に問題があることに注意 (ヴレフスカヤとプスケント B-1 は連弧文銘帯鏡)。

訳 4) 原文では「CE 42 ~ 49 年」となっているが、引用元

の文献 8 を確認して訂正した。

訳 5) 原文では「文献 7」掲載とあるが、「文献 8」の誤。

訳 6) 認識に問題があることに注意。

訳 7) 認識に問題があることに注意 (ファルハツで出土した鏡は星雲文鏡)。

引用文献：

1. Akishev K. A., Vairakov K. M., Erzakovich L. V.: Акишев К. А., Байпаков К. М., Ермакович Л. В., 1986, *Отрар в 13-14 веках*, Алма-Ата. [『13 ~ 14 世紀のオトラル』]
2. Al'baum L. I.: Альбаум Л. И., 1955, *Буддийский храм в долине Сангзара*, Доклады АН Уз ССР. N8. [『サングザル溪谷の仏教寺院』ウズベク = ソビエト社会主義共和国科学アカデミー報告 N8]
3. Baruzdin Yu. D.: Баруздин Ю. Д., 1957, Карабулакский могильник (раскопки 1955 г.), *Труды института истории АН Кирг ССР*, вып.3, Фрунзе. [『カラブラク墓地 (1955 年の発掘)』『キルギス = ソビエト社会主義共和国科学アカデミー歴史学研究所紀要』3 号]
4. Baruzdin Yu. D.: Баруздин Ю. Д., 1961, Карабулакский могильник, *Известие АН Кирг ССР*, серия общественных наук, т. III, в.3, Фрунзе. [『カラブラク墓地』『キルギス = ソビエト社会主義共和国科学アカデミー報』社会科学 III 卷 3 号]
5. Baruzdin Yu. D., Brikina G. A.: Баруздин Ю. Д., Брыкина Г. А., 1962, *Археологические памятники Баткена и Лайляка (юго-западная Киргизия)*, Фрунзе. [『バトケンとライリャク (南西キルギス) の考古遺跡』]
6. Bernshtam A. N.: Бернштам А. Н., 1950, *Труды Семиреченской археологической экспедиции «Чуйская долина»*, составлены под рук-вом А. Н. Бернштама, *МИА №14*, М-Л. [『セミレチエ考古学調査隊 "チュイ盆地" 紀要 (A. N. ベルンシュタムの手記による)』『ソビエト連邦の考古学に関する資料と研究』14]
7. Bulling A., 1955, The decoration of some mirrors of the Chou and Han periods, *Artibus Asiae*, vol. XVIII, Ascona.
8. Bulling A., 1960, *The decoration of mirrors of the Han period, A chronology*, *Artibus Asiae, supplementum XX*, Ascona.
9. Boronets M. Ye.: Боронец М. Э., 1951, Отчет археологической экспедиции Музея истории АН УзССР о раскопках погребальных курганов первых веков н.э. возле станции Вревская, *Труды Музея истории народов Узбекистана*, вып.1, Ташкент. [『ヴレフスカヤ駅付近の CE1 世紀のクルガン墓地に関するウズベク = ソビエト社会主義共和国科学アカデミー歴史博物館の考古

調査隊報告書』『ウズベキスタン人民歴史博物館紀要』1 号]

10. Gorbunova N. G.: Горбунова Н. Г., 1990, *Бронзовые зеркала кугайско-карабулакской культуры Ферганы. Культурные связи народов Средней Азии и Кавказа (древность и средневековье)*, М. [『フェルガーナのクガイ - カラブラク文化の青銅鏡』『中央アジアとカフカス人民の文化的関係』]
11. Gritsina A.: Грицина А., 1982, Каунчинское погребение первых веков н.э. в Ташкенте, *История материальной культуры Узбекистана*, вып.17, Тш. [『タシケントの CE1 世紀のカウンチンスク墓地』『ウズベキスタンの物質文化の歴史』17 号]
12. Guguev V. K., Treister M. Yu.: Гугуев В. К., Трейстер М. Ю., 1995, Ханьские зеркала и подражание им на территории юга Восточной Европы, *РА 1995-3*, М. [『ヨーロッパ南東圏における漢鏡とその倣製鏡』『ロシア考古学』1995-3]
13. Davidovich E. A., Litvinskii B. A.: Давидович Е. А., Литвинский Б. А., 1995, Археологический очерк Исфаринского района, *Труды АН ТаджССР*, т. XXXV, Сталинабад. [『イスファラ地域の考古報告』『タジク = ソビエト社会主義共和国科学アカデミー紀要』XXXV 卷]
14. Zadneprovskii Yu. A.: Заднепровский Ю. А., 1960, *Археологические памятники южных районов Ошской области (середина I тыс. до н.э.-середина I тыс. н.э.)*, Фрунзе. [『オシ州南部地域の考古遺跡 (BCE 1 世紀中葉 ~ CE1 世紀中葉)』]
15. Zaslavskaya F. A.: Заславская Ф. А., 1959, Богиня плодородия в коропластике Афрасиаба кушанского времени, *История материальной культуры Узбекистана*, вып.1, Тш. [『クシャン時代のアフラシヤの土製小像中の豊穰の女神』『ウズベキスタンの物質文化の歴史』1 号]
16. Isamidinov M., Rapen K., Grene F.: Исамидинов М., Рапен К., Грене Ф., 2001, Раскопки на городище Коктепа, *Археологические исследования в Узбекистане 2000г.*, Самарканд. [『コクテパ城址の発掘』『2000 年のウズベキスタンにおける考古学研究』]
17. Kabanov S. K.: Кабанов С. К., 1948, Археологические находки на Фархадстрое, *Известия АН УзССР*, №5, Тш. [『ファルハツロイにおける考古学遺物』『ウズベク = ソビエト社会主義共和国科学アカデミー会報』5]
18. Kozhombardiev I.: Кожомбердыев И., 1960, Новые данные

- о Кенкольском могильнике, *КСИИМК, вып.80*, М. [「ケンコール墓地の新資料」『物質文化研究所の報告と野外活動調査短報』80号]
19. Kozhombardiev I.: Кожомбердыев И., 1963, Катакомбные памятники Таласской долины, *Археологические памятники Таласской долины*, Фрунзе. [『タラス盆地のカタコンベ墓地』]
20. 孔祥星・劉一曼 1984『中国古代銅鏡』文物出版社
21. Litvinskii V. A.: Литвинский Б. А., 1961, Исследования могильников Исфаринского района в 1958г., *Археологические работы в Таджикистане VI*, Сталинабад. [「1958年のイスファラン地域の墓葬の調査」『タジキスタンにおける考古調査』IV]
22. Litvinskii V. A.: Литвинский Б. А., 1964, Зеркало в верованиях ферганцев, *СЭ 1964-4*, М. [「フェルガーナ人の信仰における鏡」『ソビエト民族学』1964-4]
23. Litvinskii V. A.: Литвинский Б. А., 1978, *Орудия труда и утварь из могильников Западной Ферганы*, М. [『西部フェルガーナの墓地で出土した労働具と生活用具』]
24. Litvinskii V. A., Zeimal' V. A.: Литвинский Б. А., Зеймаль Т. И., 1971, *Аджина-Тепе (Архитектура. Живопись. Скульптура)*, М. [『アジナ-テペ (建築・絵画・彫刻)』]
25. Lunina S. V.: Лунина С. Б., 1983, Погребальный инвентарь Акгамского могильника. (Пскентский район), *Материалы по археологии Средней Азии*, сборник научных трудов ТашГУ №707, Тш. [「アクタム墓地(ブスケント地域)の副葬品」『中央アジアの考古学上の資料』国立タシケント大学学術論集 №707]
26. Lubo-Lesnichenko E. I.: Лубо-Лесниченко Е. И., 1971, Китайские бронзовые зеркала с изображением животных и винограда в собрании Эрмитажа, *СГЭ, XXXII*, Л. [「エルミターージュコレクションの動物と葡萄の造形のある中国青銅鏡」『エルミターージュ美術館簡報』XXXII]
27. Lubo-Lesnichenko E. I.: Лубо-Лесниченко Е. И., 1975, *Привозные зеркала Минусинской котловины: к вопросу о внешних связях древнего населения Южной Сибири*, М. [『ミヌシンスク盆地の搬入鏡: 南シベリアの古代住民の対外関係に関する問題に寄せて』]
28. Masson M. E.: Массон М. Е., 1953, *Ахангеран: Археолого-топографический очерк*, Тш. [『アハンゲラン: 考古-地形学的概説』]
29. Nedashkovskii L. F.: Недашковский Л. Ф., 2000, *Золотоордынский город Укек и его округа*, М. [『ジョチ・ウルスの都市ウケクとその管内』]
30. *Отчет Археологической комиссии за 1896г.*, СПб. [『考古学委員会 1896年報告書』]
31. Rotarov A. A.: Потапов А. А., *Пскентский могильник*, Отчет о раскопках А. А. Потапова 1930г., Рукопись-Архив Комитета охраны памятников материальной культуры при Кабинете Министров РУз. [『ブスケント墓地』1930年の А. А. ボタポフの発掘に関する報告書. 手稿資料: ウズベキスタン共和国内閣付属の物質文化文献保存委員会アーカイブ]
32. Prokhorova T. A.: Прохорова Т. А., Гугуев В. К., 1992, Богатое сарматское погребение в кургане 10 Кобяковского могильника, *СА 1992-1*, М. [「コビャコヴォ墓地 10号クルガン中の豪華なサルマート墓」『ソビエト考古学』1992-1]
33. Rapin K., Isamidinov M., Khasanov M., 2001, *La tombe d'une princesse nomade a'Kok-tepe pres de Samarcand*, Comptes rendus des séances de l'année 2001 Janvier-mars, Paris.
34. Rasporova V. I.: Распопова В. И., 1972, Зеркала из Пянджикента, *КСИА вып.132*, М. [「ペンジгент出土鏡」『考古学研究所の報告と野外活動調査短報』132号]
35. Rempel' L. I.: Ремпель Л. И., 1951, Новые материалы к изучению древней скульптуры Южной Туркмении, *Труды ЮТАКЭ, т. II*, Ашхабад. [「南トルクメンの古代彫刻研究についての新資料」『南トルキスタンの考古学的総合学術調査隊紀要』II巻]
36. Rupert M., Todd O. J., 1935, *Chinese bronze mirrors: a study based on the Todd collection of 1000 bronze mirrors found in the five northern province of Suiyuan, Shansi, Honan and Hopei, China*, Peiping: San Yu Press.
37. Smirnov A. P.: Смирнов А. П., 1951, Волжские булгары, *Труды государственного исторического музея, вып. XIX*, М. [「ヴォルガのブルガル人」『国立歴史博物館紀要』XIX号]
38. Sosnovskii G. P.: Сосновский Г. П., 1946, Раскопки Ильмовой пади (предварительное сообщение), *СА т. VIII*, М. [「イリモヴァヤ・パジの発掘 (中間報告)」『ソビエト考古学』VIII巻]
39. Stratanovich G. G.: Стратанович Г. Г., 1961, Китайские бронзовые заркала: их типы, орнаментация и использование, Восточно-азиатский этнографический сборник, *Труды Института этнографии, новая серия т. LXXIII*, М. [「中国青銅鏡: それらの型式、図案、そして用途」『民族学研究所紀要』新シリーズ LXXIII 巻 (東アジアの民俗学論集)]

40. Terenozhkin A. I.: Тереножкин А. И., 1950, Согд и Чач, (Автореферат кандидатской диссертации, защищенной на заседании Ученого Совета ИИМК 28 апреля 1948г.), *КСИИМК* вып.33, М-Л.:сс.152-169. [「ソグドとチャチ」(1948年4月28日に歴史・物質文化研究所教授会会議で発表された修士論文紹介)『物質文化研究所の報告と野外活動調査短報』33号]
41. Uvarova P. S.: Уварова П. С., 1900, Могильники Северного Кавказа, *Материалы по археологии Кавказа (собранные экспедициями Императорского Московского Археологического Общества, снаряженными на Высочайше дарованные средства)*, вып.VIII. [「北カフカスの墓地」『カフカス考古学の資料(帝室モスクワ考古学協会探検隊の収集資料)』VIII巻]
42. Fyedorov-Davidov G. A.: Федоров-Давыдов Г. А., 1966, *Кочевники Восточной Европы под властью золотоордынских ханов: Археологические памятники*, М: изд-во МГУ. [『ジョチ・ウルス汗政権下の東ヨーロッパの遊牧民』]

略称:

- АН УзССР — Академия наук Узбекской Советская Социалистической Республики.
- АН КиргССР — Академия наук Киргизской Советская Социалистической Республики.
- КСИИМК — *Краткие сообщения о докладах и полевых исследованиях Института истории материальной культуры.*
- КСИА — *Краткие сообщения о докладах и полевых исследованиях Института археологии.*
- Л — Ленинград レニングラード
- М — Москва. モスクワ
- МИА — *Материалы и исследования по археологии СССР.*
- РА — *Российская Археология.*
- РУз — Республика Узбекистана. ウズベキスタン共和国
- СГЭ — *Сообщения Государственной Эрмитажа.*
- СПб — Санкт-Петербург. サンクトペテルブルク
- СЭ — *Советская Этнография.*
- Тш — Ташкент タシケント
- Тш ГУ — Ташкентский государственный университет. 国立タシケント大学
- Узкомстарис — Узбекский Комитет по охране памятников старины, искусства и природы. ウズコムスタリス
- ЮТАКЭ — *Труды Южно-Туркменистанской археологической комплексной экспедиции.*

本論文原載:

Минасянц В. С., 2010, Китайские зеркала из собрания государственного музея истории Узбекистана, обнаруженные на территории Ташкентской и Самаркандской областей, *Ўрта осиенинг қадимги ва ўрта аср шаҳар маданияти анъаналари, (Ўзбекистон Миллий университети археология кафедрасининг 70 йиллигига бағишланган илмий анжуманига йўлланган маърузалар тўплами)*, Тш: YANGI NASHR.: 94-99. [『中央アジアの古代と中世都市の文化伝統(ウズベキスタン国立大学考古学講座70周年記念学術会議論文集)』]
* 原載論文と訳文とでは掲載写真が異なる

著者紹介:

ミナシャンツ ヴァズゲン ソソヴィチ (Минасянц Вагген Сосович) は1949年タシケント生まれ。1972年に国立タシケント大学歴史学部の中央アジア考古学学科を卒業した。1972年から現在までウズベキスタン科学アカデミー付属ウズベキスタン国立歴史博物館に勤務する。考古収蔵資料の管理者ならびに博物館の修復部門主任である。

ウズベキスタン科学アカデミー考古学研究所とウズベキスタン国立歴史博物館のタシケントならびにテルメズ考古学隊のメンバーとして発掘に参加。主要な職務上の関心と研究テーマは、ゾロアスター葬俗(オッサリ)に関すること、博物館考古所蔵資料の充足による歴史再現に関すること、そして博物館コレクションである彫刻のある宝石とスタンプ(宝石印章と封泥)、鏡に関することなどである。30本以上の論文と小冊子の著者である。

翻訳後記

中央アジアで出土した漢鏡に対する関心は高く、日本でもウズベキスタン国立歴史博物館が所蔵する鏡が『古鏡』(樋口隆康, 新潮社, 1979)などで紹介されてきた。しかしその収蔵資料の来歴についてはこれまで詳しく紹介されてこなかった。本論文は同館研究員による資料報告であると同時に、同地域の漢鏡研究に基づいて考察されており、同地の研究者の見解を知るために重要と判断して訳出した。調査と翻訳にあたり、以下の方々にお世話になりました。V. S. ミナシャンツ、オタバク・アリプジャンフ(Отабек Арипджанов)(ウズベキスタン国立歴史博物館)、高濱秀(東京国立博物館名誉館員)、山内和也(帝京大学文化財研究所) 本訳文はサントリー文化財団2014年度「若手研究者のためのチャレンジ研究助成」を受けて行った「編年確立を目的とする中央アジア諸国で出土した漢鏡の調査」の一部成果です。(大谷育恵)